有島記念館と歩む会

土香る会

会報６号
平成 30（2018）年
9 月 30 日発行

TSUCHI-KAORU-KAI　NEWSLETTER　VOL. 6　September 30th. 2018

■目次

□巻頭言：相互扶助／土香る会会長　井上剛・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
□読むということ、書くということ、伝えるということ／事務局　梅田滋・・・・・・・・・・ 3
□活動報告と今後の予定（土香る会、有島記念館、有島謝恩会）・・・・・・・・・・・・・・・ 4
□プロジェクトの想い：「未来会」の活動／高木直良・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
□交流広場：会員の想い、会員の声／坪田史子、南重光・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
□会の運営を話し合う・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
□有島に吹く風：大地揺れ、瞬く星に／土香る会副会長　菊地寛・・・・・・・・・・・・・・・19
□編集後記ほか：・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

巻頭言

相互扶助

土香る会会長　井上　剛

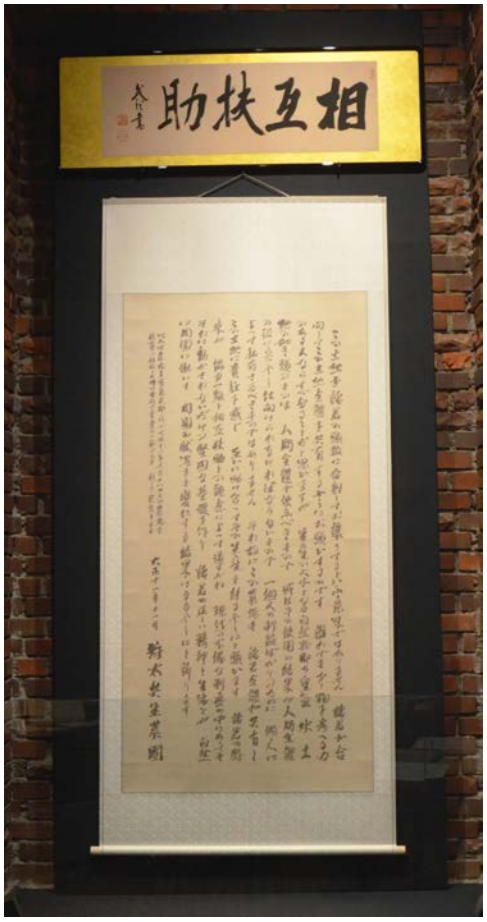
やむを得ない事情があって町内会から抜けたことがあります。十数年前のことです。思うところがあり、今年になって復帰することにしました。復帰直後に町内会で夏祭りがあり、準備や後片付けを含めて参加の機会を得ました。初めてお目にかかる皆さんともおしゃべりをして、一緒に作業をする中で共同体を意識することになりました。

でもいいことばかりではなく、おやっと思ったこともあるのです。再入会に当たって班長さんに伺ったところによると、我が家の周りでも半分の世帯は未加入でした。ニセコ町全体での加入率統計は出ていませんが、約4割が未加入だと聞いたことがあります。町内会ごとに抱える問題が違うことは言うまでもありませんが、未加入者がいることはほとんどの町内会に共通しているように思います。町内会が単なる親睦団体であればさほど問題は感じませんが、そうでない現状で果たしてこのままでいいんだろうかとの思いが湧いてきます。

私も十年以上未加入でしたから、両方の立場を経験したことになり、それぞれの言い分が分かってきます。納得できることもあれば、考えの押しつけだったり自分勝手だなと感じることもあります。夏目漱石ではありませんが、「知に働けば角が立つ、情に棹させば流される」というわけで世間はなかなかに難しいのです。どちらの立場にも理があります。主張し合うだけでは何も生まれません。より多くの人が納得する収め方を探ることが大事になってきます。私が初めに「思うところがあり」と書いたのは、町内会とは何なのか、何のためにあるのかを、今度は加入者の立場から考えて見たいと思ったからです。

町内会問題の現状を見て分かることがあります。年々未加入者が増加傾向にあるにも拘わらず、町役場からの大切な情報（広報ニセコや選挙公報、保健福祉関係など）が町内会ルートで流されることです。つまりポイントは二つ。未加入者がいることで、加入か未加入かで町民が区別されてしまい仲間意識を持てないでいることと、未加入者が情報難民にされていることです。

有島武郎が「相互扶助」という簡潔な言葉にどんな思いを込めたのかと考えることがあります。上からの圧力や搾取に対抗して自分たちの利益を守る縦の流れと同時に、自分たちの中での仲間割れ（分断）を避けるべく努力する横の動きも併せて考える必要がある、ということになるでしょうか。ニセコ町が全国に先駆けて作った「まちづくり基本条例」と、「住民自治」という言葉。この二つが今こそ出番を待っているようです。町内会問題は「相互扶助」を考える大きなヒントを与えてくれています。



読むということ、書くということ、伝えるということ

事務局　梅田　滋

土香る会が毎月行っている有島武郎の作品を読んで意見交換を行う「読書会」は、２０１６年11月からこの９月までに20回を数え、彼の作品31点と、関連する他の作品を５点ほど読み、参加者の「感想文集」を毎回発行して来ました。

作品を読み、感想を文章にまとめて朗読発表し意見を交換する、という積み重ねが何をもたらしたのか。その答えは、参加した一人一人の想いの中に蓄積されていると思いますが、９月の読書会で、そのことを実感する場面がありました。

武郎の心中直前の作品を取り上げたこの日の議論は、どうしても、彼はなぜ心中したのか、というテーマに行き着いてしまいます。会員からの読書感想文に、「私は、有島が創作に行き詰まって自殺をしたとは思っていません。」という問題提起がありました。彼の自殺については様々な見解があり、その一部に武郎の創作限界説があることは、彼の生き方に関心を持つ読者は皆知っていますが、異説もあります。この問題提起の一文に、読書会の参加者はみな、「同感だ、彼の作品を読んできた実感として、創作意欲や創作水準に衰えがあるとは感じられないし、彼は死の直前まで新たな表現手法に挑戦していた」とのご意見でした。

専門家や一般流布の説をそのまま鵜呑みにするのではなく、自分自身が読み考え感想を書き、意見を交換して積み重ねて来た成果が、この日この議論で共有された一幕でした。

読書会には様々なスタイルがありますが、土香る会では、誰か指導者に学ぶのではなく、自分で読み感じ考え書いて伝え合う方法を積み重ねてきました。作品を読むということは、あたかも楽譜に書かれた曲を演奏することに似て、演奏した人の心によって作品に新たな命が与えられる創造的な行為だということが、読書会参加者の実感として共有されているような気がします。

このことは、他の事業の中でも感じます。「土香るラジオ文芸館」では、二人のMCがゲストを迎え一定のテーマをめぐりトークをするのですが、そのテーマについては事前に基本的なことだけ打ち合わせをし、方向性を共有してから収録します。収録内容は台本なしで、その場のやりとりで創り上げていきます。あたかも、ジャズなどの掛け合いのような、伝え響き合う創造的行為です。これまで話し手自身も含めて誰も気が付かなかった初めての着眼点が、トークを介して生まれた番組が何回もありました。

７月に行った第１回目「カフェ土香る」も、そのような創造的試みの一つでした。地域に眠る様々なエピソードを当事者から聞き、その中に感じた喜怒哀楽を、聞き手自身の想いを重ねて記録に籠めました。また、同様のエピソードが文学作品として表現されている例に出会い、その世界に潜んでいた魂が眼前に再生される様を体験しました。さらに、そのエピソードの背景となっている時代状況についてかつて地域に密着して調査研究された記述が、生々しい思考として蘇りました。

土香る会の様々な事業は、有島武郎の作品を原点として、その世界に息づいている生命を読みとり、それを今度は私たち自身が表現していく、一連の脈々とした創造的行為なのだと感じます。その創造的な繋がりが、さらに新たな活動と事業を生み出していく予感がしています。

活動報告と今後の予定

□土香る会の事業報告

（4月～9月）

1．読書会の報告

第15回読書会　4／28

（参加者6名+1名）

有島武郎が聖書に題材を求めた三部曲の最後を飾るのは『聖餐』。聖書に題材を取った人間模様という意見あり、また、武郎は聖書を人間の本質が描かれている芸術的表現物だと考えていたという意見あり。要するに、武郎は聖書を文学作品として扱っていた、ということには異論が無かったようです。

イエスが自分の母親のことを「何の関係もない」とか「誰のことでしょう」と言う部分を取り上げた感想がありました。それに対しては、自分の言動で母親に災いが及ばないような配慮ではなかったか、という常識的な意見に落ち着きました。関連して、武郎の母親（幸子）に対する配慮も感じられるという意見も出ました。ただ、聖書を脚色している武郎が、上述の発言部分はカットせずに残したのは何故か、については問いが残ったままになっています。

イエスは自分を投げ棄てて他人のために働くことこそ大事だと考えます（一粒の麦の話など）。イエスは自分が死ぬことによって人のためになると考え、かたやユダや他の弟子たちは死なずに国や人のために尽くして欲しいと願っていた。その考えの違いが、イエスをして「私が笛を吹いても、あなた方は踊ってくれようとはしない」と言わしめたのでしょう。ユダをはじめ弟子たちは頭で分かろうとしている。信ずるということは頭で分かることでは無いと思う、との発言まで出て、12使徒に是非聞いてもらいたいと思いました。ついでながら、イエスが処刑されなかったら、基督教という宗教にはなっていなかったという意見も出ました。

武郎の文学は、暗示や逆説を書くことに特徴があるので、逆説という切り口を取り上げたのは面白いとの意見がありました。例えば「命を得ようとするものはこれを失ひ、これを失ふものゝみが誠の命に至るのだ」というイエスの言葉。単に死ぬだけなら復活に至らず、新たな生命（価値）が進化して再現されるのが復活。分かりやすく言えば、死後は相手の心の中で永遠に生き続けることが復活ではないか。それは死ななければ達成できないことだ、というわけです。

それは更に文学についても敷衍され、文学作品は完成したときに死の状態として固定されるが、読者に読まれることで作品に新たな生命が吹き込まれ、復活すると続きました。

「三部曲」を通して眺めた場合、分かってくることがあるとの指摘もありました。その一つは、ナアマ（大洪水の前）、サムソン（サムソンとデリラ）、イエス（聖餐）は3人とも神と人の間に生まれた子であり、最後は非業の死（ナアマは消極的な滅びの死、サムソンは積極的な怒りの死、イエスは復活をもたらす死）を遂げる設定になっているというもの。

もう一つは、武郎は、生の理想と性の欲望の自己矛盾を解決しようと苦しんだが、一人や二人の作中人物（例えば『カインの末裔』『或る女』）では解決できなかった。それでも限界を超えたかった武郎は「旧衣」を捨てて「新たな衣装」をまとうという打開策に出た。それが『聖餐』と『星座』という小説であり、『惜しみなく愛は奪う』という評論であった、というものです。武郎の作品をよく読んだ人だからこそ分かる視点だと思いますが、ここでは指摘を紹介するにとどめます。

第16回読書会　5／26

（出席者7名＋1名）

読書会の進め方に関して、大きな方針変更が提案、了承されました。これまで15回に亘り1～3作品を読んできましたが、結構重くて暗い作品が多く、また作品によってはかなりの分量がありました。もう少し意見交換に時間を割きたい気持ちもあります。今回から2か月かけて課題作品を読もうということになりました。無理しないことも長続きのコツです。

武郎の表現の巧みさについては毎回のように出てきます。『或る施療患者』では特異な文章表現が随所に見られることから、表現の可能性を探る試みをしていたとの指摘がありました。

有島は人に振り回される一生を送った、という感想もありました。迷惑だとか関わりになりたくないと思いながら、何とかしてやろうとして巻き込まれていく武郎の性格（？）は多くの著作の登場人物に表れているのです。

酒癖の話も出ました。酔って吐いたり、立ち小便をしたり、怒鳴り散らしたり、正体がなくなったりと、昔は酒癖の悪い人は一杯いた。五稜郭では酔って堀に落ちる者がいたとか、寮生活では無理矢理呑まされたりしてハチャメチャだったとか、先生が学校で酒盛りをしていたとか。また、父親が夜仕事で出る時、訪問先で酒を飲まされないように幼い自分をバイクに乗せていって酒を断る口実にしていたなど、酒にまつわるネタは尽きません。

『骨』に出てくる人物名でホツトツという名前がありました。「勃」（ボツ）と同じ意味で、つくりがチカラではなく「枚」と同じ「ぼくづくり」で「ホツ」と読みます。トツは「凸」と書きます。何故こんな変な名前にしたのかと思っていましたら、作品の中にこうあるという指摘が。

――私がとっつぁんぼっちゃんなら、あの男はぼっちゃんとっちゃんだ(p460)

だから私は「トツボツ（トツホツ）」であの男は「ボツトツ（ホツトツ）」なのです。いやあ、なるほどなあ、と皆で納得しました。

武郎は第四階級にはなれない自分を発見した。だから文学は何のためにあるのか、文学で何が出来るのか、と考えたのでしょう。文学で世界は救えないが人は救える。文学は心にあるどろどろした部分を表現し、苦しみや痛みを救う。宗教が綺麗な形で表現しているのと対照的だ、などの意見が出ました。

作家が作品を書くのは、酒飲みが酒を飲むのと同じだという面白い発言がありました。さらに、作家は作品を書いても救われない。だから次の作品を書く。また、救われないというのは作家に自死が多いのと関係があるのかという問いかけもありました。また、酒を飲むことが仮面を取ることだと考えると、作品を書くことも仮面を取ることになるのではないか、という意見もありました。

第17回読書会　6／16

（参加者6名+1名）

前回と同じ作品を巡ってのやりとりです。

武郎は不在地主として自分の農場で小作人という存在に触れていて、彼らに共感を抱くと同時に嫌悪も感じていたことは『親子』に出てきます。

第四階級とはブルジョアジー（第三階級）に対するプロレタリアート（労働者階級）のことですが、武郎は「自分は第四階級にはなれないし、ならしてもらおうとも思わない」と言っているようです。第四階級のために何かするなんて事は思い上がった考えだ、とも思っていたようです。

武郎は、それでも自分には何

か出来るのだろうか、と考えました。彼が考えたのは、第四階級以外の人たちに、自分の著作を通して「今の世の中は間違っていないか？」と訴えようというものだったのでしょう。労働者は武郎の小説を読む時間もお金もありません。だから労働者たちに苦労と貧乏を押しつけて、世の中を変える気もなく安穏と暮らしているその他の人々を動かすしかないと思ったのかもしれません。

母親の骨を一部持っている。自分のと一緒に何処かの木の下にまいてもらい、梶井基次郎が書いたように（『桜の樹の下には』かな？）妖しい花を咲かせたいと思います・・・という感想がありました。

墓に関しては、嫁ぎ先の墓に入っても先祖は知らない人ばかり。実家の墓に入る女性もいる。自分は樹木葬でもよい、などの意見が出されました。先祖代々の墓の世話をしたくないとか、墓に入った後は世話されたくないなど、今ではいろんな考え方が出てきています。死の捉え方、葬式、さらには先祖、家族といったような、普段取り立てて考えないことについても昔のような常識めいた一つの決まったものがあるわけではありません。多様な考えを容認する時代になりつつあるとも感じます。

自然などのような目の前にあるものを言葉で言い表そうとするのが自然主義、印象主義で、武郎の場合は言葉を連ねて浮かび上がってくるものを狙う感じで、彼はこれを表現主義と言っている、という解説がありました。すぐさま、短歌や詩はそれに当たるのではという意見が出ました。詠んだ歌の中に作者が見えないと短歌はダメだと言われているようです。だから単に風景を詠んでいるのではなく、自己表現なのだと。絵画や音楽だって、そういう意味では表現主義だよね、という話になりましたが・・・ちょっと理解を超えたところもありました。

楽しい日常の延長に死があると思えると、楽に死を迎えられるのでしょうか。人間も自然物の一つだから亡くなってもいいんだと年取ってから思えるようになったとのつぶやきがありました。なかなかそうは思えないよね、と他の人の声。上げ膳据え膳は面白くない。食事を作ることが昔は苦痛だったが今は楽しい。一人暮らしを始めてから食事を作ることが楽しくなった、などの意見も。自然体になれるのなら年を取ることも悪くない、と思えた読書会でした。

第18回読書会　7／22

（参加者7名+1名）

いつものようにSaさんに感想文を読んでもらい、登場人物や粗筋が判ったところで、すかさず発言がありました。読んでみても、登場人物は誰一人「訴え」ていないのになぜ『訴へ』という題をつけたのか？この問いかけから作品の解剖が始まりました。

物語の構成を考えたとき、この作品は想定したはずの1／3くらいに当たるだろう。これから主人公が大人になっていったときの話を書くつもりだったのではないか、と作話に詳しい参加者の貴重な指摘がありました。また、たまたま手にしたノートに書かれていた話という形になっているが、武郎はある人から実際にノートを預かっており、その書き手にも会って話を聞いているので、実話を下敷きにした作品だという情報が出されました。

今でも時折見聞きするのですが、山奥などの小さな村では、住民数も少ない上に、その大半が一族であることがあります。「閉ざされた社会の中で生きてゆく為に、重ねた不都合なことは見えなくしてしまう」という感想がありましたが、武郎はそういう風に闇に埋もれていった

人達のことを書いたのではないか。そしてそれは「一般社会の縮図のような人間関係や事件」だ、という感想もありました。時代に翻弄され、その時代ならではの運命的な死を迎えざるを得なかった人達を描いた作品だという意見には賛成が多かったと思います。これは、武郎が何を訴えたかったか、という問いに対するこの場での答えになっています。

未完の小説ということで、なぜ書けなかったのか、書けないというのは何なのかというところに話が進みます。当然のことながら、文章の技量や構想力が足りなかったということではないでしょう。なぜ行き詰まる必要があったのだ。情死などせずに昭和を生き、戦後も生きていけば自分の思想が活かされる可能性もあったのではないか。だから自分には限界がある、自分ではダメだと思い込んで命を絶ったのは認められない、との厳しい意見も出ました。

明治、大正、昭和と時代を経るにつれ、だんだんとよくなってきたと思っていたが、最近怪しくなってきた。国や財閥の動きなのか、どうも戦争を否定しない空気を感じる。戦争を知らない人が多くなってきたし、戦争を知ろうともしないように思う、と心配する年配者の声がありました。他の人も同じように感じているようで、庶民の皮膚感覚というものは、為政者が何をどのように言おうとも正常に機能するものだと確信した読書会でした。

第19回読書会　8／18

（参加者4名+1名）

主人公が彌助に笑顔で挨拶した一瞬の後、彌助が豹変し、鎌を持って主人公を追いかけてきたことについて気にかかっていたという参加者は、主人公の顔に仮面を見たのではないかという説で納得したということでした。この「仮面」という考え方については賛同者がいました。

仮面を被ることで、自分をさらけ出さずにいられるという面と、自分だと特定されずに本性を現わすことができるという面の2つがある、という話になりました。ちなみに「隠す」ということも複数の参加者から出ました。自分に都合の悪いことは隠したがるものであり、それが明るみに出ないことを前提に他人の噂をするという指摘がありました。「噂」と「隠す」も隠れた主題ではないかという感想もありました。

次は、今回盛り上がったもう一つのテーマについてです。

『人形の家』で有名なイプセンの話が出ました。何故イプセンなのでしょう。それは恐らくイプセンが芸術と人生の間の深い矛盾に悩んでいたことに武郎が気づいて共感したのではないか、という感想が出されました。

イプセンの最後の戯曲『死者の復活する時』に関しても武郎は評論を書いています。その中に戯曲の主人公2人（芸術家ルベックとそのモデルであるイリーネ）のダイアログが引用されています。

イリーネ：（一寸蔑んだ風で）芸術の仕事が第一……それから第二に人間ね

全身全霊を捧げた自分に対して応えてくれなかったルベックを評するイリーネの言葉です。この台詞に対して「イリーネの気持ちがよく分かる」という感想があり、思わず口をついて出たように感じました。自分を全否定されたと受取るのでしょう。芸術で世間的な評価を得ることと女性を取ることは選択肢として成り立つのでしょうか。芸術家について武郎が言ったこととして紹介がありましたので、要約してみます。

芸術家の三つのタイプ：

1．生活全部を芸術に捧げる人

2．芸術と実生活が分けられず、自分が納得する関係性を見つけ

ないと芸術を生み出せない人
3．芸術は実生活のための便宜（名声、地位、金などのため）と考える人

武郎自身は第2のタイプだと言っているようです。そのことから、じゃあ武郎にとって波多野秋子は何だったんだろうという話になりました。秋子との出会いがなかったら、武郎は長く生きて違う作風の作品を書いたのか、秋子が一緒に死んでほしいと言わなかったら、2人で幸せな生活を送っていただろうか、などなど。秋子という渦に我知らず巻き込まれてしまったのではないか、という意見もありました。最後、武郎は秋子という女性ではなく、彼女の中にある死を選んだと思うという意見が出ました。死に引き寄せられたわけだから、秋子がいなくても結局自死に至ったのではないかということになりました。

第20回読書会　9／16

（参加者5名＋1名）

『独断者の会話』が話の中心でした。先ず、題名の問題です。独断というのは「自分一人の考えで決めること」（新明解）ですが、何を独断しているのか、自分を独断者と思っているのか、会話をする必要はないのでは、などの疑問が出されました。独断はするんだけど、そこに行くまでには葛藤がある。自分の内で一人で葛藤することになるので、必然的に会話の相手は「抽象化された他者」（＝自分）しかない。その葛藤を書いたのではないか、という考えが出されて皆は、成程そうなのか、となりました。

そこでテーマですが、いくつもの葛藤（これまでの著作で取り組んできた諸問題）の過程を順次映し出していく形を取っているという指摘がありました。それは武郎が作家活動の中でテーマとして掲げた3つ（労働、婦人、子ども）ではないかと同調する意見も出ました。

次に形式の話になりました。自問自答らしいことは分かりましたが、なぜ「会話」なのでしょう。武郎は「詩」というものを音楽に次ぐ最高位の芸術表現だと考えていましたが、それは小説には不可欠な地の文が逆に要らないからだ、という解説も出ました。つまり余分なものを削ぎ落としてエッセンスだけを書く表現に取り憑かれたわけです。実際に8編の詩を書いていますが、この『独断者の会話』も地の文が全くないエッセンスだけの会話です。ト書きのない戯曲になっています。短歌や俳句に魅せられていたのもそれと同じ理由なのでしょう。

一人対話とも言える形式で書かれたこの作品を読んで、武郎の心の中を本当に見てもよいのですかと躊躇いながら覗いて見ている気持ちがする、と感想を書いてくれた人がいて、言い得て妙だと感心しました。それだけ武郎が心の奥深くをさらけ出していると言えそうです。

遺書についても話し合われました。どの遺書も穏やかな書きようだという人がいます。遺書の中で幸せだと断言すればするほど違和感を覚えるという人もいます。自分の退路を断つ意味で敢えて幸せだと自分に言い聞かせる必要があったのだろう、とか、退路を断つことが出来て吹っ切れたために穏やかになったのだろう、というのが大方の意見でした。

ミステリーまがいの問いかけも複数の人からありました。この作品を書き終えたのが5月12日。心中が6月9日。それまで生きることにすがっていたはずの武郎が1か月足らずの間になぜ死を選んだか。どんな心境の変化があったのか。波多野秋子との激しい駆け引き、綱引きがあったのかも知れませんが、謎は深まるばかりです。（井上）

2．土香るラジオ文芸館

土香るラジオ文芸館（2018年度上半期） 名前は担当者、敬称略					
月日	テーマ	この人に聞く（ゲスト）	ゲストの話題	土香る会からのお知らせ	記念館からのお知らせ
4月13日	武郎が狩太に来た道	菊地昌子	狩太に来た頃	宍戸庸一	伊藤大介
5月18日	武郎と曽我農場の交流	米田齊①	曽我農場の歴史	南重光	伊藤大介
6月15日	武郎と音楽	米田齊②	ニセコの音楽文化	藤田健太郎	伊藤大介
7月13日	有島文学における自然	持田誠	ニセコ有島の生態系	空淳子	伊藤大介
8月10日	武郎の留学	ミッチェル・ラング	武郎とシアトル	水上みち	伊藤大介
9月14日	武郎と王子製紙発電所	佐藤智恵子 春日井雅子	記憶の中のニセコ	梅田滋	伊藤大介

3．カフェ土香る

12ページ参照

4．未来会

14ページ参照

5．「星座忌」での献花

6月9日（奇しくも有島武郎の命日）に、有島記念館メモリアルホールで「星座忌」（有島記念館主催）が行われ、林知巳ニセコ町副町長、高橋守ニセコ町議会議長と共に、土香る会井上剛会長が献花をしました。

星座忌終了後は、室内楽のコンサートが行われ、能登谷安紀子さんのバイオリンの音色が有島武郎の遺影の前に漂い、遠く想いを馳せるひとときとなりました。

6．有島謝恩会の事業への参加

5／7　有島灌漑溝の泥上げ作業に参加しました。（井上、梅田）

6／23　有島灌漑溝の草刈り作業に参加しました。（井上、梅田）

9／15　有島地区の弥照神社例大祭に参加しました。事前の社殿清掃と事後の直会にも参加しました。（井上、梅田）

7．書籍の販売

星座の会発行の書籍について、価格を半額に引き下げて販売を継続することにしました。他の類書には見られない個性的なテーマの書籍を、多くの人に読んでいただきたい、という想いからの価格改定です。

8．デジタルアーカイブ事業

『カリフト夜話』の原本や共生農団関連第一次資料の整理が終わった段階でスキャン入力することを目指し、有島記念館と作業段取りについて協議しています。

9．有島記念館への寄贈

7月18日、土香る会から有島記念館に15万円の寄付金目録を渡しました。これは、有島武郎生誕１４０年・『生れ出づる悩み』出版１００年を記念する各種企画展示及び出版事業に対する協賛の意味もあります。

□土香る会の事業予定

（10月～3月）

平成30年度に於て引き続いて実施する事業は次の通りです。

（1）会報7号発行
（2）読書会
（3）土香るラジオ文芸館放送
（4）視察研修旅行
（5）「カフェ土香る」第2回の企画
（6）有島地区を考える未来会
（7）聞き取り調査
（8）デジタルアーカイブ事業
（9）有島武郎生誕１４０年『生れ出づる悩み』出版百年記念事業への協力

□有島記念館の事業報告

（4月～9月）

○企画展

・藤倉英幸展[季節をたどってPart1]（3・24～7・22）

※関連イベント：藤倉英幸ギャラリートーク（5・13）、ギャラリーツアー（6・12）

・しりべしミュージアムロード展（7・14～9・24）

・藤倉英幸展[季節をたどってPart2]（7・28～10・8）

※関連イベント：鮫島惇一郎&藤倉英幸講演会（7・28）

有島記念館周辺の植物を使った草木染体験（7・29）

○普及事業

・植物観察と鉄道遺産を巡る地域資源お散歩ツアー（6・3）

・星座忌コンサート：弦楽四重奏（6・9）

・朗読と音楽の調べ：リュート／永田斉子　朗読／兎ゆう（7・14）

・茂木健一郎とミューズたちの音の花束（7・30）

・野瀬栄進ジャズピアノコンサート（8・10）

・能登谷安紀子ヴァイオリンリサイタル　ピアノ友清祐子（8・25）

・しりべしMRコンサート（9・1）

・札幌コダーイ合唱団コンサート（9・9）地震により中止

・永田砂知子波紋音コンサート（9・22）

□有島記念館の行事予定

（10月～3月）

○企画展

・有島武郎青少年公募絵画展（10・27～11・11）

・有島武郎・木田金次郎展（11・22～12・16）

・冬の藤倉英幸展（12・22～3・17）

※関連イベント：藤倉英幸ギャラリートーク（12・9）

○普及事業

・明楽みゆきチェンバロコンサート（10・7）

・西富遺跡見学会（10・14）

・小松崎健打弦楽器（12・8）

・映像上映会（1月中・内容未定）

・映像上映会（2月中・内容未定）

・宮山登山会（3・9）

※この他にも予定している行事があります。日程等詳細が決まり次第随時お知らせします。

□有島謝恩会の事業紹介

有島謝恩会は、有島灌漑溝と弥照神社の維持管理活動を行っています。

○有島灌漑溝の泥上げと草刈り

有島武郎と吉川銀之丞が大正10年に造成した灌漑溝は、現在も現役で水田に用水を供給しています。羊蹄山を水源地とする冷涼な水温を日照熱で温めるため、水路の傾斜を緩くして水がゆっくり流れるようにし、地形との高低差を所々で調整する斜段などの機能を維持するため、毎年、有島謝恩会と水利組合は地域の人々に参加を呼びかけ、延長4キロメートルを超える灌漑溝の全線で、5月に泥上げ、6月に草刈りを行っています。

大正10年以降、有島農場時代から共生農団そして農団解散以降へと続く長い歴史の中で継続してきた営農施設管理作業ですが、農家の高齢化と後継者難による離農傾向が続き、農家だけでは維持が難しくなってきました。

しかし近年は、有島地区の新住民からも参加する人が増え、また、地域外の有志による作業への参加も見られ、有島地区の営農施設の維持だけでなく、旧有島農場の原風景の維持にも結びついています。

○弥照神社のおまつり

有島武郎が大正11年に農場の無償解放を告げた弥照神社は、有島謝恩会が春と秋に例大祭を行っています。また、元日には、誰でも初詣でができるよう社殿を開放しています。例大祭の参拝や直会（なおらい）には、地域外からの参加も可能とのことです。有島農場を支えた地域の人々の名前が記された木札などが社殿内に掲示されており、地域にとっての歴史的な意義を再確認する機会として、大切にされている祭事です。

有島の里に息づく記憶を口承
「お地蔵さんの呟き」に耳傾ける参加者
第1回「カフェ土香る」開催

土香る会では7月21日午後2時から、有島記念館ロビーで「カフェ土香る」を開きました。有島農場解放記念日にちなんだ土香る会オリジナル企画で、創造と語らいのひろばを、と2017年度の総会で決定し、この日の実施となりました。

第1回の話者は、会員の梅田滋さんで、当日の表題は「首落地蔵と悪ガキたち」です。有島地区にお住まい、あるいはかかわりのある古老の方々を訪ねての聞き書きを、大正から昭和にかけての時代背景と重ねて、物語を紡ぎ、梅田さんご自身の朗読により、紹介されました。（内容の概要は13ページに）

梅田滋さん（作・口演）に、参加者一同より「アーリシ・マイスター」称号献呈

会場の有島記念館ロビーのコーナーには、実行委員会の想定を上回る20人余が集まりました。

梅田さんは、有島地区の景観と登場人物の名前をプロジェクターに映し出し、ひとり語りふうに語り始めます。高校生によるハンドベルの曲（閉校になった喜茂別高校の生徒のメモリアル演奏CDより）を織り込み、40分間にわたる熱演です。関連する狩太共生農団資料も配布されて、休憩時間をはさみ参加者との意見交換が行われました。

取材・制作のご苦労と素敵で奥行きの深いストーリーに対して、梅田さんには、参加者一同より、として「アーリシ・マイスター〜有島の星2018〜」との称号が入った小額縁が井上剛会長から手渡され、大きな拍手によって、90分間の集いは幕となりました。

次回開催に期待の声も
新・実行委員会立ち上げへ

9月18日、今回担当した実行委員会による総括ミーティングが行われ、準備、課題、今後等について、整理しました。

当日の会場でのご意見の他、後日、個別の会話を通じて、今回の内容や今後の展開、要望にも言及があったとのことで、前向きに受け止められている、との評価になりました。

今回の話者、梅田さんからは「伝承は伝える側と受けとる側の交流を成立させること」との実感が述べられ、あらためて課題の一つに位置付けて、取り組むことになりました。

次回開催は、ビエンナーレふうに2年後の2020年7月を想定していますが、来年開催を、との声もあり、新たに実行委員会を立ち上げて、実施計画を具体化し、実現へ向けて進めることになりました。

（2018カフェ土香る実行委員・菊地　寛）

第1回カフェ土香る
「首落地蔵と悪ガキたち」

梅田　滋

現代口承文芸、というコンセプトをもとに「カフェ土香る」の企画が提案された時、すぐに思い出したのは、有島地区にお住いの亀田満吉さんから以前お聞きした、小学生の頃のエピソードでした。記憶というより、今なお心の中で疼き続けている満吉さんの怒りが突き刺さるように伝わってくる昔語りでした。同時に思い起こしたのが、有島出身の作家阿部信一さんの小説『屠殺』に描かれた物語です。そこには、満吉さんの怒りが昇華の道を辿るような、深い内面世界が描かれていました。そして、亀田さん、阿部さん一家を含む有島農場開墾の歴史を綴る高山亮二さんの著書が明らかにした、狩太共生農団に対する権力の圧迫と共生農団員による戦いの物語も思い出しました。

これらいくつものエピソードが絡み合って一つの奔流となり、表現の場に飛び出たいと呟いているのを感じたことが、『首落地蔵と悪ガキたち』が生まれるきっかけでした。語り継いでほしい、という声を聞いてしまった自分も、その語り継ぐ一脈の声になりたい、そう思ったのです。

物語は、学校の教師による理不尽な暴行を受けた主人公の男の子を軸に展開します。暴行に抗議するため教師に会った父親は、学校だけでなく地域の中に根を下ろしていた、狩太共生農団に対する偏見と、それを進める権力の意図を感じます。父親は、子供たちの遊びの対象となった地蔵に会いに行った寺で住職と会い、住職から、地蔵菩薩の教えの中で子供たちの無邪気が人間の深い真実に触れていく体験を知ります。その体験に潜む生きることの深い矛盾を肯定的に受け止めることを学んだ悪ガキたちと父親は、地域社会の権力支配に馴染んだ価値観が、権力を笠に着る本人たちの人生の中で崩壊していく様を予感して、物語を閉じます。

この物語は、私自身の中に眠っていた幻想の世界です。亀田さんの語りにも、阿部さんの小説にも、高山さんの論文にも、直接的には何も表現されていません。「現代口承文芸」というのは、現代に伝わる様々な形式の物語の中に、今を生きる自分たち一人ひとりの想いを重ね、そこから、新しい物語を紡ぎ出す創造的行為です。その「繋ぐ」ことと「創る」ことを撚り合わせて、これまで生きてきた人たちが抱え込んできた深い矛盾に共感する心と、自分自身の中に眠っている多様な矛盾に一つ一つ気付き向き合っていく姿勢を自ら創造していく行為なのだということを、自分自身を描き他者に伝えることで、知ることができました。

登場人物はすべて私自身の分身のように思えます。物語を書いている過程では、私の中の別の自分を一人ひとり外に送り出して切り離したい気持ちだったのに、できた作品を朗読している過程で、彼ら一人ひとりが私の中に戻ってきて私自身の多様な個性を再確認し、自分の生の姿を改めて外から眺めることができたような気がしました。

地域の中に起きる様々な出来事、軋轢や親和は、表現することで外の世界に旅立ち、そんな多様な自分や地域の姿を外の目で見つめ直す機会を得ます。そして最後は、そのようにして出会ったたくさんの反応を抱えて、再び私の中に戻ってくるのです。

そんな旅を、第1回は私の表現を介して、みなさんと一緒に歩んでみました。今度は、別の方の旅に同伴して、一緒に楽しんでみたいと思います。

プロジェクトの想い

「未来会」の活動

高木　直良

「未来会」は、昨年度にスタートした「有島地区の望ましい環境についてみんなで考え、その創造に向けた取り組みを行うプロジェクト」です。現在のメンバーは、井上剛、高木直良、梅田滋、北島常雄、斎藤海三郎、小池伸之の６人です。

有島地区全体の歴史的な価値の発掘や景観の保全、「文学・歴史の散歩道」フットパスコース全体の標識、地図整備等による分かり易さや魅力の発信による利用者の増大などを有機的に考えて行こうと5月以降数次にわたり会合を重ね、構想案の論議をしてきました。

その主要な内容は以下のとおりですが、現在は下記②の地図づくりを重点に進めています。

◆フットパスを含む地区全体を町民や外来者にもっと親しみ活用される場にするために

①有島文学等の舞台となったエリアの一部に触れ、木田金次郎や地元ゆかりの文学者（畔柳二美、阿部信一）、学者（中谷宇吉郎）の作品にも親しめる場とする。

②狩太共生農団と有島謝恩会の理念と開拓の歴史を感じ取る場を駅からの案内版の工夫や案内地図の作成によって分かり易く案内する。

③美しい自然と農場の景観を楽しむ場＋文化の香りのするエリアとして、旧牧羊舎や現牧草地の利用を進める。音楽やアート作品（屋外）に触れる芸術祭を行う。（公募で事業者が決まった場合には、町民が利用する場としての提供を求める。）

④日常的に広場として自由にじっくり楽しめる空間づくり（美しい草地やカシュンベツ川沿いの散策の道としてのフットパス整備）

⑤他のエリアとのネットワークづくり…倉庫邑や第一発電所、サイクリングロードとの連携、転車台、旧軌道線の歴史の見える化やフットパス沿いのでんぷん水車小屋復元、カフェ＆農家レストラン（宿泊も可能な）などの構想

⑥上記の様な取組み、構想に対し、ニセコ町内の大手事業者への資金協力要請の検討も。

◆ニセコ町「旧有島サフォーク牧場」跡地の活用事業者公募への対応

ニセコ町（教育委員会）は今年度中に、旧サフォーク牧舎や牧場エリアの有効活用を行う事業者を公募し決定するとしています。公募要項作成に先立ち、町民意見を公募したため、大筋下記のような意見を会として提出しました。

―「文化的」発信地としての有島記念館とその公園的空間としての公共的役割を損なわないことを大前提としていくつかの具体例を以下に記載。

○現在の草地景観を基本的に守る…例えばＢエリアは従来通りの牧草地のままとする。Ａエリアも草地としての景観は低草木（菜の花、レンゲ草、すずらん、ひまわり、ラベンダー、コスモス等）と最小限の通路（園路）とし、ゾーニングや種まきや刈取りなどの管理を町民参加で行う。

○工作物は景観になじむ野外展示アート作品などの設置にとどめ、新たな工作物を配置しない。（有島の作品やニセコの自然をテーマに若手造形家から毎年公募、優良作品の一定期間の展示も考えられる）

○できれば、綿羊、山羊の飼育を再開（季節限定でも良い）する。ウサギ等の小動物とのふれあいの場とする。

交流広場
会員の想い、会員の声

「有島」という冠

坪田　史子

先日、新聞で作家・故佐藤泰志の小説が映画化、公開された記事を読んだ。

佐藤泰志と言っても御存じない方もいると思うが、１９８０年代五度も芥川賞候補になるほどの作家であった。

近年の再評価で作品が映画化され、どれも高い評価を受け、今回公開された映画は四作目。映画化の度に小説も刊行されるのはありがたい話である。

そんな佐藤は有島と同じように四十代で自ら命を絶ったことが知られているが、「有島青少年文芸賞」の受賞者でもある。

有島の冠の付く「有島青少年文芸賞」は昭和三十八年、「有島武郎青少年公募絵画展」は平成元年、北海道に所縁のある作家であり絵画に造詣の深い有島武郎を記念する文化事業として道内在住の青少年の文学・芸術への関心、またその素質を育てるためにそれぞれ創設された。

有島の没後四十年を記念した「有島青少年文芸賞」は、今年で五十六回を数える。

しかも、その半世紀を超える歴史の中で、この賞は素晴らしいことに何人もの作家や学者を輩出した。

佐藤もそうだが、映画化と言えば大学の卒論「もう頬づえはつかない」が小説、映画ともにヒットした見延典子。

見延は平成13年から、この賞の選考委員をしており、遠い広島県から駆け付ける。

作家でもあり、大学教授の澤井繁男。作家であり評論家の千街晶之。

文学者であり大学准教授でシェークスピア劇についての著書もある北村紗衣。

北村と同時期に受賞し、高校時代から才能を発揮している歌人であり作家の加藤千恵。

中学時代から「現代詩手帖」などで活躍し、高校時代に中原中也賞を受賞した詩人の文月悠光。

多分、これらはほんの一握りで、他にもこの賞の出身の方が沢山活躍されていることと思う。

私事だが、娘が中学生のころ、以前受賞され方に「有島に応募するなら、作家を目指すくらい本気で書かなくては駄目。」と言われたことがあった。

こうしてみると、今活躍されている方が最初から、そこを目指していたかどうかは分からないが、この賞が北海道出身の作家の育成に深く関わっていることが分かる。

創設時の狙い通り、素材・原石を見つけることでは成功しているのではないだろうか。

娘は有島記念館で神谷先生の講演を聴き自分の進むべき道を決めた。

院ではやはり記念館で講演された中村先生に学んだ。

この賞にもご縁があり新聞掲載されたが、作家ではなく生徒に教える立場になった。

「今の中学生は村上春樹も知らないのよ」と嘆くばかりだ。

しかし、世の中が変わろうとも、北海道に「書きたい」「有島に応募したい」と思っている十代がいる。

それだけで大人の私は救われた気持ちになる。そこには、彼らにしか表現できない瑞々しい感情、伸びやかな感性、尽きることのない悩みがあるからだ。

「書く」と「描く」、表現の仕方は違っても、公募絵画展とともに、青少年の才能を育てる使命がある「有島」の冠の付いたこの賞がいつまでも続くことを願ってやまない。

有島武郎との出会い

南　重光

ちょっと気取ったタイトルで気恥ずかしいのですが、私が武郎を知った経緯と、その後の関わりについて書いてみます。

まず、私がニセコに来たのは25年前の師走です。それまで暮らしていたカナダで知り合った友人に誘われた、ヒラフのホテルでの冬の期間雇用でした。住み込みで3食付き、手取りはすべて貯金して、再び海外に行く為の資金にと考えていたのですが、結局は誘惑に負けスキーと飲み会に明け暮れ、満了時にはすっからかんです。海外どころか、実家に帰る金もない有様。そんなときに手を差し伸べてくれたのは、ヒラフのあるペンションでした。最後の給与振込日まで居候として置いてくれたのです。春になりほとんど仕事はないのにです。本当に感謝の言葉もありません。

その時、オーナーからここは夏もいいよと勧められ、海外よりニセコへの興味が強くなり、ニセコで暮らすようになりました。中古のＭＴＢを買い、ニセコ周辺の散策を始めたのですが、ある日有島武郎記念館を見つけ、なんと素敵な所があるのだろうと驚きました。牧歌的な風景に意志を持ったような近代的建物が佇んでいます。その夜、同僚に「ありしまたけろう記念館って知ってる？」と聞いて苦笑されました。実は、有島武郎のことはよく知らなかったのです。文学史で調べると、なんとなく憶えのある題名の小説が載っています。ニセコに縁のある作家の作品なら読んでみるかと思ったのですが、そのうち機会があればと後回しにしていました。

数年後にその機会がやってくるのですが、それがあまりいい出来事ではありません。ＭＴＢで転倒して骨折してしまい、10日間の入院となったのです。

それで時間つぶしに有島武郎全集を読み始めたのですが、正直にいいますと睡眠薬となった作品も多くありました。

ところがその後ＮＯＣのガイドとなり、研修で有島記念館前館長の飯田先生の講義を受ける機会を得て、武郎の生涯とその思想が作品に与えた影響をほんのちょっとですが理解するようになり、更に羊蹄山麓地域歴史文化ガイドを受験した際にも、再び飯田館長から有島武郎という人間を深く掘り下げて学ぶことができまして、眠気を誘った作品達も彼の思想や意志を反映する意義深い作品なんだと思い知ります。また、武郎の父と私は同郷だと知ると更に親近感が湧きました。

このようにＭＴＢでの散策で武郎の存在を知り、ＭＴＢでの怪我で彼の作品に触れることになったのですが、これがニセコでの生活をより豊かなものにしてくれました。

有島記念館を見つけたあと、木田金次郎美術館も行ってみましたし、帰郷した際には川内市の有島一族の記念館を訪ねました。また、作品を読むとき、『親子』で地主の子の心境に自分を重ね父を思いますし、『カインの末裔』では汗水垂らす空腹の小作人となり、『生れ出づる悩み』では激しい波と格闘しながら、この風をどう描こうかと思案する岩内の漁師となれます。

彼の描いたニセコの暮らしはとても厳しく困難なものです。だからこそ相互扶助という精神が生まれ醸造されて来たのだと思います。私は、武郎の意志はいつまでも大切にニセコで受け継がれていくと信じています。

会の運営を話し合う

□通常総会

平成30年度通常総会を4月21日（土）午後2時より、有島記念館ブックカフェにて開催しました。会員16名の参加により、議案の全てについて意見の交換が行われ、議決されました。

特に、今年度は役員の改選期に当たっており、新しい役員体制がスタートしました。

決議された議案のうち、平成30年度の事業計画と新たな役員体制は、次の通りです。

◎承認された事業案

Ⅰ：平成29年度から引き続いて実施する事業

1　土香る会の「会報」を定期発行する（6号、7号）

9月30日に第6号、3月31日に第7号を発行します。これまでと同様、会員にはメール添付でデータ配信し、メールアドレスを持っていない会員には印刷して届けます。また一般の方も持ち帰りできるよう、記念館内のPRコーナーに置きます。

2　有島武郎の文学作品、ニセコに関連する作品等の読書会

3年目の読書会です。毎月1回のペースで、有島武郎晩年の作品などを読み、感想を話し合います。

3　「土香るラジオ文芸館」の放送

2年目の「土香るラジオ文芸館」です。番組構成を一部変えて、「有島」に新たな視点から光をあてる話題を組み込んで様々な人に登場していただきます。

4　文学や美術など、有島の芸術にちなんだ視察研修旅行

3年目の「視察研修旅行」を行います。時期や視察先については、未定です。

5　「カフェ土香る」事業実施

「現代口承文芸」というコンセプトのもと、第1回目は、「記憶を言の葉に、そして物語へ～お地蔵さんと悪ガキたち～」と題して、有島農場解放記念日7月18日に近い週末7月21日に行う予定です。

6　「未来会」の活動

有島地区の緬羊牧場跡地活用構想を巡って、有島謝恩会有志による検討グループと連携して意見交換を行います。

7　聞き取り調査やその記録などによる、有島地域に眠る記憶の掘り起こし

有島地区ゆかりの人々からの聞き書き活動を、有島記念館と共同で進めます。

8　「星座の会」より引き継いだ、有島武郎関連の書籍の販売

価格改定を行い販売を促進するとともに、絶版や在庫切れになったものの再版をどうするか、新たな書籍を出版するかなど、販売書籍の全般的な見直しを検討します。

Ⅱ：平成30年度から新たに実施する事業

1　デジタルアーカイブ事業（データ入力、アーカイブ資料の勉強会）

昨年度、土香る会から有島記念館に贈呈したブックスキャナを使用して、『カリフト夜話』の入力をはじめとして、狩太共生農団帳簿その他の記念館所蔵資料をデジタル入力していきます。

2　有島武郎関連のアニバーサリー企画

２０１８年は有島武郎生誕１４０年、『生れ出づる悩み』発行１００年に当たります。それを記念して、有島記念館が行う特別記念展示や関連出版事業に協力します。

3　有島地区を北海道遺産に！

２０１８年3月に有島記念館が申請した「有島地区を北海道遺産に！」が認定された場合、遺産地域の望ましいあり方について共に考え創る活動をします。

4　「私の創作作品」を発表

会員の様々な創作活動の成果を鑑賞し、各自の表現意欲を刺激し合う作品公表の場として、土香る会のホームページを立ち上げて広く発信します。

◎新しい役員体制

会長　井上　剛（新）
副会長　菊地　寛（新）
理事　小野剛良
佐藤智恵子
小池伸之
高木直良（新）
樫原和雄（新）
菊地昌子（新）
監査役　佐竹三郎
山崎英文
事務局　梅田　滋
春日井雅子

◎出された意見

○有島農場地区を全体として俯瞰できるような広報メディアが必要。個々の歴史文化資源に関する看板や全域の広域マップなど現場の表示や、パンフレット類及びホームページなどで積極的にPRすべきだ。

→●このテーマについては、未来会の活動に組み込んで継続的に取り組んでいくこととした。

○読書会の活動を多くの人に報告、紹介する冊子を、「感想文集」などをもとに作成してはどうか。また、現状の「感想文集」については、著者名をイニシャルではなく実名でもいいのではないか。

→●どのような形態が良いか、読書会の参加者で話し合うこととした。

○会員による創作作品発表の場は、過去の資料を体系化する「アーカイブ」ということではなく、現在から未来に続く創作活動紹介の場として位置付けるべきではないか。

→●今年度の事業として提案しているホームページ開設の中で、そのような趣旨のコーナーとして検討を具体化することとした。

○「土香るラジオ文芸館」（毎月1回60分）の放送音源を、誰もが聴けるようにはならないか。

→●課題はありそうだが、実現に向けてラジオニセコ側と協議していく。

お知らせ

左の書籍が販売になりました。

『『生れ出づる悩み』を読む』

・編者　有島武郎・木田金次郎プロジェクト

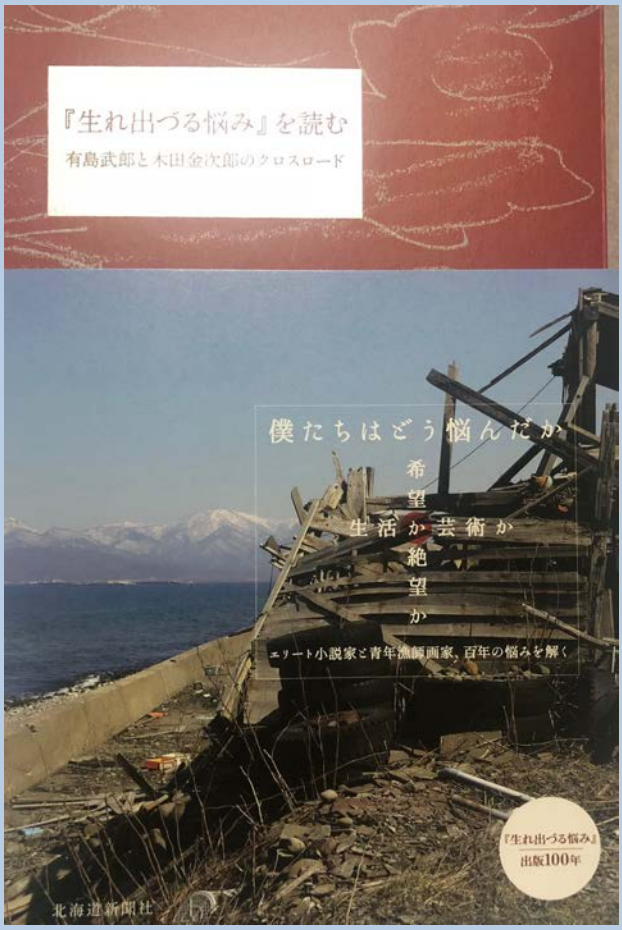
・発行者　北海道新聞社

・定価　２０００円

会員価格でお求めになれますので、有島記念館にお申し出ください。

※北海道新聞の書評より一部引用

『生れ出づる悩み』「刊行１００年にあたる今年、後志管内ニセコ町の有島記念館と同管内岩内町の木田金次郎美術館が中心となって、本作や２人のことを知ってもらうためのプロジェクトが進んでいる。今回の出版もその一環だ。・・（略）・・２人の自筆作品や風景写真をふんだんに掲載したユニークなデザインが、まず目をひく。内容は本作の発表当初に近い形でも再掲、木田の絵画の紹介と、改題・解説、・・（略）・・コンパクトな中に「生れ出づる悩み」の世界がフルコースで詰まった好著。巡回展も開催され、札幌のJR　タワー・プラニスホールでも、10月13日から11月4日まで開催される。」９／23



有島に吹く風
大地揺れ、瞬く星に

土香る会副会長　菊地　寛

２０１８年９月６日午前３時７分、羊蹄山麓の町村でも、大地が激しく揺さぶられ、間もなく停電。北海道胆振東部地震の発生です。山崩れに襲われ、前触れもなく犠牲になられた多くの方々には、ただただ冥福をお祈りするばかりです。

夜が明けるにつれて、被害の甚大さが携帯ラジオなどで切れ切れに伝わってきました。発電、水道、交通などライフラインの断絶は北海道全域に及び、暮らしの基盤の脆さを思い知らされます。陽が落ち、明かりが消えた夜を迎え、なすすべもないままに外へ出ると夜空は満天の星。人間の生死をも、計り知れない尺度で包み込んでしまうような瞬きです。

１４０年前に生を受けた有島武郎が、ニセコアンヌプリの麓を訪れ、同じ星空に心身を委ねて、小説の想を練り、来し方行く末に思いを馳せたことがあったか、どうか。知る由もありません。

その武郎が軽井沢の別荘・浄月庵で、自ら45年の生に終止符を打ったのは１９２３年（大正12）６月９日未明。84日後の９月１日午前11時58分、関東大震災が発生しました。東京・横浜が焦土となり、死者・行方不明10万４千人、流言飛語が飛び交う中で６千人を超す朝鮮人が自警団に虐殺されるという事態をも招きます。

彼が存命であったとすれば、この大震災に遭遇し、惨状を目の当たりにしたか、どうか。いわれもなく奪われた生の無念と、自らの意思で絶つ生の無常。幽明境に在ったのかもしれない作家は、この状況をどう活写し、後世に遺したか。歴史にイフはないことは承知のうえで、有島の地と、関わる方々とのご縁をいただいた者として、足下に響く限りある生を謳うがごとき虫のすだきに、思う事しばし、悠久の星空を見上げていました。

■会員へのお知らせ

●会員募集のお誘い

会の自主事業の財源を会員のみなさんの会費で賄うために、会員70名を目指しています。現時点での会員数は、59名となっています。

周りの方にもこの会報を渡していただき、会員になって一緒に活動してくださるようお誘いください。

●各プロジェクトスタッフ募集

各プロジェクトのスタッフになっていただける方は、事務局にご連絡ください。

編集後記

読書会が、20回に達しました。その蓄積や継続性もうれしいことですが、参加することで毎回得られる、多様な想いに接する喜びを感じています。同じ一つの作品を読んでいるのに、どうしてこんなに受け止め方が違うんだろうという驚きとともに、各人の想いの豊かさをひしひしと感じます。読書会以外の場で出会う人も含め、自分はなんと素敵な関係性の中で生きているんだろう、とも思います。それは、感謝という言葉では言い尽くせない感情です。自分の中の、かくも矛盾に満ちた、闇としか言いようのない濁った想いを卒直に吐露した感想にもまっすぐに向き合って、会話と議論の糸口を探し出そうとしてくれる人たちの存在。有島武郎にも、そのような友人や愛する人がいたんだろうな・・・／梅田

二〇一八年九月三十日発行
発行　土香る会（有島記念館内）
〒０４８・１５３５
ニセコ町字有島５７
０１３６・４４・３２４５

あなたは　どこにいきたいの？
もっと心の奥へ

もう一人の自分と逢いに